

「兵士たちからの侮辱」

2014年12月04日

マルコによる福音書 15 章 16 節～20 節。兵士たちは、官邸、すなわち総督官邸の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、「ユダヤ人の王、万歳」と言って敬礼し始めた。また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。

最高法院は、主イエスを神への「冒瀆罪」という宗教的罪状で死刑に決議した。彼らは主イエスが民衆に尊敬され、支持されていたので、自分たちの手で殺害せず、ローマの総督ピラトの手で死刑を執行させようとした。そこで、宗教的罪状を「ユダヤ人の王」というローマに反逆する政治的罪状にすり替えて、ローマの総督ピラトに訴えた。最高法院は、群衆を抱き込み、ピラトに圧力をかけ、無理やりに、十字架刑を宣告させた。強権で恐れられたピラトも最高法院に屈した訳である。ピラトの尋問は官邸の前で行われた。時は「過越祭」で、異邦人宅に入ると汚れるので、官邸には入らなかった。主イエスは、十字架刑の宣告を受け、鞭打たれ、刑の執行のためローマ兵に引き渡された。ローマ兵は、主イエスを官邸の中に引き入れ、部隊の全員を呼び集めた。集まったローマ兵たちは主イエスに紫の服を着せた。紫の色はローマ皇帝が着るような高貴な色である。罪状が「ユダヤの王」だったので、王位を表す紫の服を着せた。頭には、宝石をちりばめた冠ではなく、茨の冠をかぶらせた。茨が突き刺さり、頭から血が流れた。彼らは「ユダヤ人の王、万歳」と叫び、ローマ皇帝にするように敬礼し、ひざまずいて拝んだりした。それから、幾度も葦の棒で頭を殴り、唾を吐きかけた。王の姿をさせ、嘲って敬うふりをし、あらん限りの侮辱を加えた。そして、血と埃にまみれた元の服を着せ、十字架の刑場に向かわせるため、官邸の外に引き出した。

主イエスは、ローマ兵たちからの侮辱の全てに無言で耐えた。愛した弟子たちは逃げ去って一人もいない。主イエスに敬意を持った人々も、この無法な状況に対し一言の異議申し立てをする者はいなかった。孤独の中で、ひたすら侮辱に耐え続けた。

十字架刑を宣告された者は十字架を背負って、刑場の「ゴルゴタ」まで歩かなければならなかった。民衆に恐怖を植え付けるために、見せしめの「市中引き回し」をした。十字架の木は重いので、縦棒は刑場に置き、横棒を担がせた。

イスラエルの鞭は「40 に 1 つ足りないムチ」と死なないように上限を定めていた。ローマの鞭は鉄の塊を入れてあり、打たれると肉もむしり取ったと言われている。体中から血を流し、前夜は、大祭司の庭で「降格儀式」を受け一睡もしていない。憔悴し切った主イエスは、十字架の横棒を担がされ、ピラトの官邸から刑場のゴルゴタに向かった。

主イエスの最期の 12 時間を描いた『パッション』という映画があった。ゲツセマネの捕縛の時から、ピラトによる鞭打ち、ローマ兵たちからの侮辱までの間、主イエスの体は受けた傷によって血だらけであった。目をそむけたくなるような惨状を描いていた。聖餐式で「これは、あなたがたのために流された主イエス・キリストの血です」という式文を読んだ時、『パッション』で観た血だらけの映像を思い出し、心が痛んだ。しかし、主イエスの苦難はこれからさらに重くなり、十字架で頂点に達する。